



万国外科学会 (ISS/SIC) 日本支部ニュース

News of Japan Chapter of International Society of Surgery

発行：万国外科学会(ISS/SIC)日本支部
〒160-8582 東京都新宿区信濃町35
慶應義塾大学医学部外科学教室
TEL: 03-5363-3802 FAX: 03-3355-4707
発行者：北川雄光
編集責任：万国外科学会 (ISS/SIC) Japan Chapter
Secretary General
和田則仁 (慶應義塾大学医学部外科学教室)
印刷：株式会社 dig TEL: 03-3551-3060
年2回発行 1995年4月創刊

ごあいさつ

Past President, ISS/SIC
Congress President, ISW2007

国際医療福祉大学学長
慶應義塾大学名誉教授

北島 政樹



ワインの名産地と云われている Australia の Adelaide で9月5日より42回万国外科学会が開催された。欧米に行くより地図上は近いという印象であるが、Singapore 経由で乗り継ぎの時間を入れて18時間近くかかった。今回は米国の Mayo Clinic の Prof. Michael Sarr が会長として開催されたが、世界の経済恐慌の余波と Australia-New Zealand 外科学会との連携の悪さの為か期待されたほど参加数は多くはなかった。また従来慣例であった Presidential Dinner や Gala Dinner もなく、多少、学会の雰囲気も異なっていた。学会前日に理事会が開催されたが、Helsinki 以後の開催地のプレゼンテーションあるいは2011年の横浜の学会などの稟議事項や報告事項があった。Helsinki 後は Bangkok にほぼ決定した。2011年の横浜学会の報告では、パンフレットやサーキュラーあるいはプロモーション活動など、準備の早さに誰一人として文句をつける理事はいなかった。特に Congress President の Prof. Ken Boffard は準備状況を知って満足そうであった。

LOC の President は渡邊昌彦教授 (北里大学) であり、PCO の日本コンベンションサービスと共に教室員が一生懸命にプロモーション活動を展開して

いたのが印象的であった。総会の Vice President は中尾昭光教授 (名古屋大学) と Prof. CM Lo (香港大学) が選出されたが、日本外科学会およびアジア地域と横浜学会の連携が非常にスムーズにいく布陣として大変満足する結果となった。今期中には多くの委員会が開催され、World Journal of Surgery の編集委員会では Editor in Chief の Prof. John Hunter の努力で IF も 2,641 で、日本からの投稿論文が最も多く、誇りに思った次第である。また Associated Editor に片井均先生 (国立がんセンター) が選出されたが、日本の影響力がさらに増すことであろう。さて、昨年も本紙で述べたように国際消化器外科学会 (ISDS) の北京大会が突然中止となり、今後の在り方を議論する為に理事会が開催された。

最終的には、ISS/SIC の Integrated Society として横浜大会より参加することになり、不肖私がかに指名され、今後の学会の舵取りを委任された。従って今回、万国外科学会に於いて恒例の ISDS 会長講演の機会を与えられ、私のライフワークでもある“がんの低侵襲・個別化外科治療”について講演した。講演に先立ち司会として会長の Prof. Sarr が写真を用いて丁寧な紹介をしてくれた事に感謝している。

さて今回のもう一つのトピックスとして永い歴史の中で初めて漢方のランチオンセミナーがツムラによって主催された。当初、参加人数が気になったが、元会長の Sir Peter Morris, Prof. Siewert が出席し、私と Prof. Sarr を含め4学会長が参加し、司会をしながら今後の東洋医学と西洋医学の融合を実体験した。演者の河野透准教授 (旭川医科大学) と島田光生教授 (徳島大学) の基礎研究に基づいた臨床成績は多くの参加者の称賛を受けた。特に Sir Peter Morris が最前列に座り、示唆に富んだコメントをしてくれ、大変感激した次第である。閉会式後の Prof. Boffard や LOC のメンバーと共に2年後の ISW2011 の成功を祈念し、新たな気持ちで Adelaide を後にした。

45th World Congress of ISS/SIC、ISW 2011、の 開催に向けて

Councilor, ISS/SIC,
帝京大学医学部名誉教授

山川 達郎



今回の ISW 2009 は、本年9月6～10日の5日間、Mayo Clinic の Professor Michael G. Sarr 会長のもと、Professor Peter Malycha (Australia) と Professor Ian Civil (New Zealand) を Local Organizing Committee (LOC) の会長ならびに副会長として、Australia の Adelaide において開催された。市街地の中央を東西に流れるトレンズ川をはさんで、碁盤の目のように区画整理された Adelaide 市の街並みは、趣きのある英国植民地時代の古い建物と緑あふれる公園とが見事に調和して、とても美しかった。会議場は、その市街地の中心部に位置していた (写真1)。会議は一見、つつがなく終了したが、世界的経済不況のあおりを受けてか、登録者数は約1,200名、On-site registration, Trade exhibitor, Accompanied person を加えても1,500人に満たず、また数少ない展示も小規模であり、Reception などは可能な限り簡素化されていた。

次回の ISW2011 も、ISS/SIC の仕来たりで、South Africa の Kenneth D. Boffard 教授を会長として、北里大学、渡邊昌彦教授が LOC 会長を務められる。すでに渡邊昌彦 LOC 会長は、準備委員会を立ち上げ、これまで数回の委員会を開催するとともに、Zurich あるいは Adelaide での ISS/SIC 理事会にも参加され、着々と準備を進めておられ、ISS/SIC 理事会もそのきめ細かな準備状況に満足し、期待しているところである。

さて、1902年に創設された ISS/SIC の長い歴史の中で、日本で開催された

のは、故斉藤 溥日本医科大学教授を LOC 会長として開催された ISW1977年の一回に過ぎない。と同時に、ISS/SIC 会長を務められた出月康夫名誉教授や北島政樹名誉教授らをはじめとする先人の ISS/SIC 中での活躍と貢献が、日本支部会の地位を不動なものとしてくれたことを我々はここで再認識すべきである。私は、1979年 ISS/SIC に入会、この2年間は理事として ISS/SIC 理事会に出席させていただいているが、日本支部の役員を務めさせていただいていた20年間を通じて、“ISW を日本で開催すべき機は熟せり”、という自信をこれほどまでに実感したことはない。この千載一遇の機会を利用して、さらに ISS/SIC での日本の地位を不動のものとするべきである。そのためには、会員の増加をはかり、各 Society の役員会への日本人会員の関与を支援すべきである。ことに Integrated Society である IAES, IATSIC, IASMEN, BSI の会員増を計り、これらの Society にも会員を送り込むことが大切である。

渡邊昌彦教授のもとで開催される ISW2011 は、私ども日本人会にとっては、最高の舞台である。これを足場として、日本の外科医が、さらに世界に羽ばたいていってくださることを心から期待してやみません。私も、微力ながら皆様のために働かせていただきたいと思います。よろしく願いいたします。



ISW2009に参加して

President, ISW 2011 LOC
北里大学医学部 外科学教授

渡邊 昌彦



本年9月6日より12日までISW2009がM Sarr 会長、P Malycha LOC 会長のもと Australia の Adelaide で開催された。南半球は早春を迎え朝晩は肌寒いものの日中は清々しく、近代的な街並みは明るい日差しに美しく引き立てられていた。北島前会長とともに6日の2009準備委員会および Sponsorship Meeting に参加した。そこでは K Boffard 次期会長や F Harder 事務局長、さらに各 integrated society の代表者が集まり今後の ISW の在り方と予算立てについて議論が交わされた。とくに ISW 2011 の企業収益をどのように配分するかについて話し合われたが、後日 ISS/SIC 本部と我々 LOC との間で明確な覚書を10月中に交わすことになった。Opening Ceremony は、厳かな中にも国際色豊かに行われた。しかし体育館のような閑散としたホールに仮説演壇や椅子が運び込まれ、全体的に質素な印象は拭えなかった。地元のアボリジ

ニの舞踊とコーラスが余興として披露された。昨今の不況の折企業援助もままならず、金銭的に厳しい中での開催がこの Ceremony に現れていたように思えた。

私どもの教室が中心になって ISW2011 をお手伝いする上で、なるべく多くの教室員に ISW の雰囲気に触れてもらおうと全員に演題応募を奨励した。その結果、17演題が採択され総勢20人の大所帯で団体旅行を敢行した。彼らは到着するや否や展示会場に ISW2011 のブースを設置し交代でパンフレットやグッズを配布した。このブースは日本で教室の秘書達がデザインし、造花などの装飾品や紙風船や風車を日本から持ち込んだ。ブースでは女性陣の艶やかな浴衣姿や、和田誠さん作のロゴマークとポスターも好評を博した。会場では活発に議論が交わされていると思えば、欠席した座長の急遽代役を探す場面など国際学会には時折みられる微笑ましい風景もあった。各々の integrated society に見合った会場の規模なども十分に参考になったが、ISW2011 では ISDS も正式に参画することから、さらに大規模な会場の準備も必要となろう。全員懇親会は生バンドや幼いカンガルーも参加して大盛況であった。開会第3日目と4日目の晩、各 integrated society は美術館、ワイナリー、クラブなど趣向を凝らしたレセプションを開いた。私は LOC 事務局長と全ての会場を駆け足で挨拶して回った。どの会場も世界は一つとばかりに和気藹々と盛り上がり、ある種の感動を覚えた。



最終日の General Assembly では本部から決算報告、IF 上昇中の WJS の J Hunter 編集長から近況報告があった。なかでも WJS へは日本からの投稿数と採択率が高いことが目を引いた。ISS/SIC 会長に K Boffard、次期会長に Sweden の G Akerstrom が選出され、また各 integrated society の新たな代表者が紹介された。次期 LOC 会長として挨拶に立った私が緊張のあまり英文を失念した一方で、はっぴ姿の片田君は堂々と横浜会場の紹介を行った。ISW2015 の開催地に立候補した Singapore、Bangkok、Dubai がオリンピック開催地争いさながら、プロモーションビデオを使った presentation を行い投票で Bangkok が1位を獲得した。このように ISW2009 は無事終了したが、私たちは本会を参考に事務局一丸となって、ISW2011 の成功を目指す決意を新たにした。

原寸大ではありません

経皮吸収型 持続性癌疼痛治療剤
劇薬 麻薬 処方せん医薬品*

デュロテップ® MT パッチ

Durotep MT Patch 一般名: フェンタニル 薬価基準収載

*注意 - 医師等の処方せんにより使用すること

効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については、添付文書をご参照ください。

製造販売元(資料請求先)
ヤンセン ファーマ株式会社
〒101-0065 東京都千代田区西神田3-5-2
URL: <http://www.janssen.co.jp>

2009年9月作成

血漿分画製剤 (液状・静注用免疫グロブリン製剤)

献血ヴェノグロブリン®-IH ヨシトミ

生物学的製剤基準 ポリエチレングリコール処理免疫グロブリン (指定医薬品、処方せん医薬品注)
Kenketsu Venoglobulin-IH YOSHITOMI 献血 (特定生物由来製品)

注) 注意 - 医師等の処方せんにより使用すること

※〈禁忌〉〈原則禁忌〉〈効能・効果〉
〈用法・用量〉〈使用上の注意〉等の
詳細については、製品添付文書を
ご参照ください。

製造販売元(資料請求先)
株式会社ベネシス
大阪市中央区平野町2-6-9

販売
田辺三菱製薬株式会社
大阪市中央区道修町3-2-10

Venoglobulin-IH

VGX-2009年2月作成

ごあいさつ

Vice President, ISW 2011
名古屋大学大学院 医学系研究科
消化器外科教授
日本外科学会 会長

中尾 昭公



このたび、ISS/SIC ISW2011の横浜大会の副会長に就任させていただきましたので会員の皆様にはよろしくお願ひ申し上げます。会長は南アフリカのProf. Kenneth Boffardであります。私は1987年のシドニーでの学会より出席し、思い出の国際学会であることは支部ニュース22号(2006年3月29日)に既に報告したところであります。先回のモントリオール大会も教室員と出席し、海外の友人と旧交を暖めるとともにケベックの美しい町を訪れることができました。

さて本年の第44回のISS/SICの大会は9月6日～10日オーストラリアのアデレードで開催されました。1987年のシドニー大会以来22年ぶりのオーストラリア訪問となりました。2011年横浜大会の会長であるProf. Kenneth Boffardとはアデレードで初めてお会いし、横浜大会のお手伝いについてお話しをさせていただきました。彼は外傷外科医であり、非常に気さくな人柄とお見受けしました。今回の参加者は約1,300人で、日本からの出席者は200余名と思われます。大変静かな落ち着いた町で夜間の安全も全く問題ない町でした。アデレード周辺のバロッサバレーはオーストラリア最大のワインの産地であり、教室員とワインテスティングに出掛け、夜は大きなビーフステ

ーキとワインを堪能しました。学会展示ホールの一画では横浜大会のLOCの会長である北里大学渡辺教授の教室員約20名が次回横浜大会の宣伝を日本色豊に繰り広げていたのが印象的でありました(写真1)。オープニングセレモニー後のレセプションで2011年横浜大会を成功させようと出席者一同で誓いました(写真2)。

2011年横浜大会は日本の外科学の成果を世界に発信するまたとない機会です。皆様のご協力とご支援をお願い申し上げます。その前に来年の第110回日本外科学会定期学術集会(2010年4月8日～10日、名古屋)でも海外から多くの外科医が参加しますので皆様のご参加をお待ち申し上げます。



(写真1)



(写真2)

アデレードでの
第43回万国外科学会に
参加して

新潟県立がんセンター新潟病院
外科 臨床部長

梨本 篤



平成21年9月6日のオープニングセレモニーから10日のgeneral assemblyまで南オーストラリアのアデレードで開催されたISW 2009に参加してきた。第43回ISSにはintegrated societiesの他に、Partner SocietyとしてInternational Society of Digestive Surgery (ISDS)も参加していた。ISDS北京大会は開催中止となったが、その演題の一部が発表されていた。参加人数は同行者や展示会場の人数も含むと1484名のことであった。朝7時半からのセッションはなかなか演者も聴衆にも厳しいものがあった。しかし、それなりの参加人数があり、参加している先生方の気迫が感じられた。

私が初めて国際学会に参加し発表したのが、1987年にシドニーで開催された第32回万国外科学会である。当時は怖いもの知らずで、一人で出かけて行って発表してきたが、ディスカッションがうまくできずに苦勞した苦い思い出がある。いつも国際学会の時に感ずる壁が語学力である。発表はともかく、発表後のディスカッションが容易ではない。東南アジア、東アジアの若い先生方が流暢に英語を使いこなす苦もなく対応しているのに比べ、苦勞している日本の先生方が少なくない。優秀な先生方が苦勞する姿を見るにつけ、語学に対する教育方針の見直しを主張せずにはいられない。語学が不得意なのは自己責任であるとの非難も聞こえてきそうではあるが、ネイティブの子供たちが不自由なく語学を使いこなしている姿を見るにつけ、実社会に役立つ語学教育の改革が是非必要である。さらに質問者の英語が慣れ親しんだ英語とは少し異なることにも戸惑う。発音が異なり、なまりがあるのみならず、かつ早口のため聞き取りにくい。日本の演者にわかりやすく質問しようなどという思いやりは全く窺えない。たくましくならねばならない。

朝から晩まで忙しく仕事に追われていた先生方もおられたようであるが。個人的には自分の発表日以外は時間的に余裕があり、アデレードの探索に出かけた。LOC会長も学会だけでなく、アデレードの町を楽しんでほしいと強

く希望していたことも幸いした。

アデレードは南オーストラリア州の州都であり、人口は105万人でオーストラリア第5の都市である。アデレードはドイツ語で「貴婦人」を意味しており、芸術を愛したアデレード王妃の名を語源にしている。碁盤の目のように整然と区画整理されており、「世界で最も住みたい都市」のひとつのことである。湿度が低く快適である。日本とは四季がまったく逆であり、9月は春の初めである。「北風と太陽」の物語がこちらでは「南風と太陽」ということになる。水曜日の午後は学会がなく休憩であることを利用して、また学会の合間をみてワイン産地であるバロッサ・バレーのワイナリー、ドイツ移民により作られたドイツの田舎町を思わせるハートルフを訪れた。車窓から野生のカンガルーが跳ねている姿やコアラがユーカリの木の上にしがみついている姿など自然の中での生き生きとした風景を観察できた。イギリスからの大航海を終え南オーストラリア州へ最初に上陸した町グレネルグでは、何の障害もなく水平線が円を描いていることが見て取れる。ここから見える海の向こうに南極があることなど想像もつかない。行きの飛行機の中から見た graduation のかかった夜明けの見事さとグレネルグの海岸で見た日没時の夕焼けの美しさは忘れられない。

次回は日本(横浜市)での開催であることから、LOCを初め関係者は気を入れてアピールしていた(ご苦勞様でした)。学会のみならず、日本の景観も堪能していただいたいものである。2011年8月28日から横浜で開催される第43回万国外科学会が成功裡に終わることを心から念願してやまない。

持続性癌疼痛治療剤
劇薬・麻薬・指定医薬品・処方せん医薬品^(※1)

オキシコンチン錠
5mg・10mg・20mg・40mg
オキシコドン塩酸塩徐放錠 OXYCONTIN[®] Tablets
注1) 注意—医師等の処方せんにより使用すること

癌疼痛治療用散剤
劇薬・麻薬・指定医薬品・処方せん医薬品^(※1)

オキノーム散0.5%
2.5mg/包・5mg/包
オキシコドン塩酸塩散 OXINORM[®] Powder
注1) 注意—医師等の処方せんにより使用すること

■ 薬価基準収載 ■ 「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌」、「原則禁忌」、「使用上の注意」等については添付文書等をご参照下さい。

①: オキシコンチン並びにオキノームは登録商標です。 2008年9月作成 B7
②: OXYCONTIN and OXINORM are Registered Trademarks

提携
manipharma ムンディファーマーB.V. シオノギ製薬
製造販売元【資料請求先】
大阪府中央区道修町3-1-8 平541-0045
電話 0120-956-734 (医薬情報センター)
http://www.shionogi.co.jp/med/

第27回万国外科学会 (ISS/SIC) 日本支部総会 2011年万国外科学会 第1回組織委員会 議事録

2009年4月4日土曜日 午前7:00～8:00
於：福岡サンパレス 2F「末広」

出席者：愛甲 孝、阿部 令彦、石川 正昭、出月 康夫、池口 正英、臼杵 尚志、宇山 一期、海野 倫明、大柳 治正、岡 正朗、岡島 正純、沖永 功太、片田 夏也、上西 紀夫、亀岡 信悟、北野 正剛、木村 理、國崎 主税、窪田 敬一、熊谷 一秀、桑野 博行、小西 文雄、後藤 満一、小山 勇、坂井 義治、桜井 洋一、佐々木 巖、篠沢洋太郎、嶋田 紘、白石 憲男、杉岡 篤、砂川 正勝、炭山 嘉伸、高野 邦夫、高橋 敏雄、高見 博、田尻 孝、田中 淳一、谷川 允彦、千々岩 一雄、塚田 一博、手取屋 岳夫、中尾 昭公、中村 清吾、中村 慶春、梨本 篤、夏越 祥次、西田 俊朗、二村 雄次、野口 志郎、橋爪 誠、比企 直樹、比企 能樹、藤元 治朗、前田 耕太郎、前原 喜彦、幕内 博康、三浦 大周、宮川 秀一、宮崎 耕治、宮澤 光男、宮島 伸宜、村尾 佳則、守瀬 善一、門田 守人、矢永 勝彦、山川 達郎、山口 幸二、山本 雄造、吉田 寛、若林 剛、渡邊 昌彦
(敬称略；五十音順) (事務局：北川雄光、和田則仁、鈴木和子)

1. 開会の挨拶：北川雄光日本支部長
2. 前回議事録確認
3. 2008年度決算案、2009年度予算案：原案通り承認された。
4. 会員動向報告
5. 監事選出(補充)：日本医科大学学長田尻孝先生が推薦され承認された。
6. Executive Board Meeting 報告：山川達郎理事

3月13日から15日、チューリッヒで開催された。日本からは北島前会長、山川理事、渡邊会長、片田事務局長、PCO (JCS池田、藤本) が参加した。日本からの新規会員は6名であった。2009年アデレードの会議の報告があった。応募演題数が少なくスポンサーセッションも1社のみである。どのように成功させるかが大きな問題となっていた。Integrated Society、Participating Society への資金の配分などが議論された。昨年、北京でのISDSが中止となり、予定されていた91演題はアデレードに移るようになったが、参加登録費の扱いが問題となった。日本人の参加費の状況は不明である。2013年はヘルシンキと決まった。2015年はドバイ、マレーシア、シンガポール、ブラジル、メキシコ、ローマが検討中である。2011年の横浜の会議についてはISS/SIC本部よりプレッシャーもあるが、LOC、PCO、本部の3者がよく相談し問題を解決していくことが成功への鍵になると思われる。

7. Executive Board Meeting 報告：渡邊昌彦LOC会長

World Journal of Surgery (WJS) の採択率は20%程度と低いが、応募論文1075のうち131が日本からで、日本抜きでは成り立たない。Impact Factorが2点を割ったため、これをあげる方策が検討された。名誉会員としてジーベルト先生、セルバンテス先生、ベルネッヒ先生がノミネートされた。アデレードは870の応募演題のうち、179が日本からで一番多い。日本の演題はほとんどが採択された。学会として少なくとも1,000題は必要であり、日本から盛り上げていくべきであろう。横浜の会期は2011年8月28日(日)～9月1日(木)である。主催は第44回万国外科学会組織委員会、共催は内閣府、日本学術会議である。学会長は南アフリカのケン・ボファード先生で、副会長として名古屋大学中尾昭公教授が推薦され承認された。LOC会

長は渡邊、副会長は北野正剛教授、Secretary Generalを北川雄光教授、事務局担当は片田夏也先生である。Integrated Societyの発言権が強いが、演題数や資金面で日本の貢献は大きいのでしっかり発言していくべきである。Participating Societyとして国内の学会に後援をお願いしている。資料2は、各Integrated Societyに対応する日本国内の学会のリストである。共同シンポジウムなどの開催で協力していただけるよう働きかけているところである。Partner SocietyのISDSについては、横浜ではIntegrated Societyとして参加していただけることを目指している。プログラムの概要は別紙のごとくである。参加費は安くしたい。日本人は早期登録で4万、on siteで5万、35歳以下は早期で1.5万、on siteで2万として若い先生に国際学会を味わっていただきたい。国外のISS会員は早期で6万円、on siteで8万円とする予定。今後のスケジュールは別紙の通りである。ロゴとポスターは消化器外科学会までに決定する。今回は臨床外科学会で開催予定である。今年中にセッションの案をお伺いし、来年の外科学会では具体的な案を出す予定。来年の臨床外科では形が整った状態にしたい。関連諸学会に働きかけてご協力をお願いしたい。

山川先生より：ISS/SICの役員が数多く変わった。新しいメンバーと連携を取る必要がある。日本からIntegrated Society本部とコミュニケーションを付けていく必要がある。北京のISDS参加費について教えてほしい。

埼玉医科大学宮澤先生：北京のISDS大会本部よりRefundを受けた。

8. 中尾副会長挨拶：副会長を拜命した。経済的な問題も含めて支えていきたい。ご協力をお願いしたい。
9. 閉会の挨拶：北川雄光日本支部長

以上
(文責 和田則仁)

